

土佐清水の歴史（1）

重要な港

現在は土佐清水市の中にある海岸近くの村は、伝統的に陸路で行くのが困難な場所だったため、特に海への依存が大きい場所でした。その後 15 世紀頃から足摺岬の両側の海岸が開発され、当時の首都の京都および商業の中心地だった大坂の両方と、明や東南アジアとをつなぐ海上交通路の重要な港になりました。貿易船の船員たちは風雨からの避難場所を提供する土佐清水の深い入り江に船を停泊させ、休息をとったり補給品を積み込んだりしました。この町の元々の名前である清水（「清らかな水」）は、喉の渴いた船乗りたちを引きつける地元の泉を指しています。

漁業の繁栄

江戸時代（1603～1868 年）初期、紀州（四国の東の本州に位置する現在の和歌山県）出身の裕福で装備も整った漁師たちが土佐の領主たちにお金を払い、足摺岬沖でカツオ漁を始める権利を得ました。彼らは地元の人々に疑似餌を使って開水域で魚を捕る方法や、鰹節の作り方を教えました。鰹節は乾燥・発酵・燻製させた魚の薄片で、昔から日本料理に欠かせない食材と見なされており、現在では土佐清水の名産品になっています。